

## 随想－散歩道の処々で（3）

川口 三郎

或る日の午後、三重大学の研究室で、インターネットで‘松岡正剛の千夜千冊’を読んでいた。松岡正剛という人は、博識な人で、古今東西の多くの書物について、それを読んだときに浮かんでくる想念と書評を綯い交ぜにした文章を綴っている。その中の一冊に『枕草子』がある。氏は、その中で、清少納言は自分の好みを大小、長短、内外に自在に分けて、スキダ・クライダとはっきりと述べていると書き、そこから、跳んで川喜多半泥子について語っている。少し長いが、以下に引用する。“光悦の再来とも乾山はだしとも言われるが、半泥子の真骨頂は「遊」である。轆轤に染まり、志野を生かし、黒楽を光らせて、織部を躍らせ……。いま川喜田半泥子の随筆、作陶、あるいは半泥子その人を語るにあたって、こんな他愛もない自慢をしたのはほかでもない、三つほどの理由というか、ちょっとした暗合があった。第1には、半泥子こそはクレイダ・クライダをはっきり言いつづけためずらしい風流断言人だったということだ。あとでも補充するが、たとえば志野・唐津・井戸茶碗はクレイダだが、仁清やノンコウや京焼はクライダなのである。竹の花生けは清浄な青竹を切つての掛流しはクレイダだが、匏や木賊（とくさ）まで加えておまけに古びているものはクライダなのだ。こういうことを齒に衣着せないで言える男はいなかった。第2には「半巡通信」に、20世紀のラスト・クレイダにその半泥子の茶碗をあげておいたことだ。よくぞそのことを書いておいたものだった。まさに半泥子こそ20世紀の忘れものなのである。このときぼくのアタマに光のように見えていたのは、粉引茶碗の「雪の曙」や刷毛目茶碗の「一声」あたりだったろうか。おもえば1984年のことだったが、生誕105年を記念して三重県立美術館で大掛かりにひらかれた「川喜田半泥子展」でこれらを見たとき、息がとまるかと感じたほどだった。いや、もっともっと傑作はある。……”

この文章を読んで、「雪の曙」や「一声」を是非とも見たくなった。所在を検索してみたら、なんと、岩田橋の袂にある石水博物館と出てきた。それなら、いつもの散歩道の中にある。それで、早速、散歩に出かけ、立ち寄って見てきた。半泥子というのは雅号、本名は川喜多久太夫政令（1878-1963）、伊勢商人の末裔で百五銀行頭取を務めた人、茶陶で有名であり、この博物館の創設者でもある。ここでは、《川喜多半泥子の茶陶と書画》の常設展示を行っており、季節ごとに展示品を入れ替えるので、その後も時々訪れている。

抹茶茶碗には、侘び、寂び、品、量、力、浄という六相があるそうであるが、そんなことは何も分からない私のような素人が見ても、「雪の曙」をよいと感ずることができる。息がとまるほどの感動というわけにはいかないが、手元に置いて、毎日、これで茶を飲むことができたなら、さぞかし幸せな気分になろうかと思う。それを見ていて、ふと思い出したことがある。加藤唐九郎が、日経新聞の「私の履歴書」に、自分の作った茶碗の中で、最高の出来と思われる作品を、或る人に見せたら、持って行ってしまった。その人は、それを肌身離さず持ち歩き、

火災にあつて焼死したため、作品も失われてしまったと書いていたように思う。茶にたしなみがあるわけではなく、茶碗を数多く見たわけでもないが、それでも、陳列してある茶碗をみたとき、これはよいと感ずることができるのは、何故だろうかと思ふ。

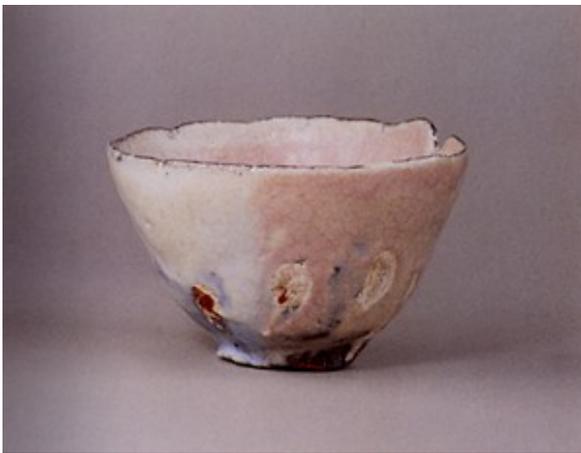
話を茶碗からぐい呑みに移す。知人のお祝いにぐい呑みをプレゼントしようと思つて、デパートの陶磁器売場を歩いてみた。一つのコーナーで見たのは、どれもよくない、値段は3000円以下であつた。歩いていったら別のコーナーにも並べてあつた。こちらの方がよいと思ふ、しかし、気に入るものは一つもない。値段をみると、5000円程であつた。さらに歩いて行ったら、もう一つ別のコーナーがあつた。一見して、先の品よりもよいことが判る。値段は10000円～30000円くらい。しかし、よいとは言つても、どの一品も買う気をそそられる程ではなかつた。帰宅後、インターネットで「ぐい呑み」を検索してみた。ぐい呑みを扱うネットショップは、いくつもある。その中のトップで出てきた京都しみず孔昌堂という店が、数点の商品を画面上に展示していた。いずれもデパートの商品より明らかによい。手に取つてみたら、買い気が起こるかも知れないと思つた。店の所在地を見ると、岩倉の自宅からは、散歩の範囲にある。散歩がてら、ひやかして覗いてこようと思つて、探してみたが、店が見つからない。それで、ホームページにあるメールアドレスに、問い合わせたら、以下のような返信がきた。「・・・ぐい呑みの件で、弊社では、お見せできるスペースが無く、宜しければご指定された場所にお持ちさせていただきます。ご自宅でも、近くの喫茶店でもかまいませんのでご検討宜しくお願いします・・・」。探しても見つからないはず、実店舗はなかつたのである。私が、「早速のご返事有難うございました。散歩がてら、ひやかして見せて頂こうと思つておりました。自宅や喫茶店にお持ち頂くのでは、敷居が高くなります。差し上げようと思つている知人に、ネットの画像で見せて頂いて、ご本人が興味を持てば、それからお願いすることになるかも知れませんが、とりあえず、実物を見せて頂くのは諦めました。私は、無趣味で、全くの素人ですが、デパートで見た後、ネットで検索してみて、貴店や萩原啓蔵のギャラリー等々を見つけ、ぐい呑みが一つの世界であることを知りました」という返信メールを送つたところ、「・・・写真ではなかなか分かりづらいので、実物をお見せできれば一番良いのですが・・・、ぐい呑みは各地の作家様の作品をコレクトするのにお手頃で、なおかつ、お茶碗のミニチュアのように繊細です。お酒を呑まない方も集められることが多いです。一品一品手作りで模様や色、形など偶然の一品になります。お手元に来たときにこの個性を受け入れ育てて頂ければ、作品として一番幸せではないかと思ひます・・・、手持ちの作品でしたら、見ていただけるだけでも喜んでお持ちさせていただきますのでお気軽にご連絡ください・・・」という再返信メールを頂いた。《ぐい呑みを育てる、それが作品にとって幸せである》という表現を面白く思つた。その後、暇にまかせて、ネット上のウィンドウショッピングを行い、かなり沢山見たと思ふ。その中で、【南天窯 ギャラリー南天】が展示していた緋色の器に目が止まり、手に取つてみるのでできないことに多少の不安はあつたが、手触りを想像しながら、購入ボタンを押した。3日後に送られてきた実物は、手触りを含めて、画像で想像していた通りのものであつた。バーチャルな世界とリアルの世界は連続しており、

時として、ほとんど区別できないような感覚を覚える。プレゼントは、知人にも気に入って頂けたようで、毎日、育てておられる由。

話を転ずる。睡眠障害高齢者の友、NHKラジオ深夜便には、午前4時台に「こころの時代」という対談がある。そこで、能の金剛流宗家金剛永謹氏の話聞き、強い感銘を受けた。その時、「亡霊の現れてくる夢幻能は、時として、名状し難い感動を引き起こす」と昔々聞いたことが、ひょっこりと思い出されてきた。そのように話されたのは、今は亡き加藤周一であったか木下順二であったか、どちらかであると思う。記憶には、古いアルバムに貼られた写真のように時間が経っても変わらないものと、時間の経過につれて変容していくものがあるが、両氏にまつわる記憶は、自分の貯蔵庫の中で変容して、一部が融合してしまったような感じがする。夢幻能の引き起こす名状し難い感動というフレーズは、その融合したところから浮かび出てきた。眠れなかったために、耳福ともいべき金剛永謹氏の話聞くことができたのであるから、睡眠障害も悪いことばかりではない、能と能面に対する興味の扉を、開けて貰ったように思う。能の世界では、能面を面（おもて）と呼ぶのだそうであるが、面は使わなければ、死んでしまう、その意味で、博物館に展示されている面は死んでいるのだそうで、氏が見れば、生きている面か、死んでいる面かは、すぐ判るといふ。面に興味をそそられ、自宅から歩いて行ける京都市岩倉図書館から、「金剛家の面」という大型本を借り出してきた。借りるには、インターネットで、蔵書検索を行い、予約のボタンを押せば、資料が確保できたというメールをくれるので、実に便利である。この本は金剛家の所蔵するものの中から98面を選んで、面と裏を原寸カラー写真で載せており、その中の銘「雪」という小面（こおもて）を見たときには、少々大袈裟な言い方であるが、息がとまるかと感じたほどだった。この小面は、三面鏡で見ると、正面だけでなく左から見たもの、右から見たものも載せられており、それらをじっと眺めていると、気品が匂い立つような感じがする。眼福である。面について、茶碗の相のようなことを言うのかどうか知らないが、侘び、寂び、品、浄といった言葉が自然に浮かんでくる。般若の面は、上の部分が苦しみや悲しみの表情で、下の部分が怒りの表情だそうであるが、眺めていると、確かに、言われた通りに見える。それにしても、イマジネーションによって、よくこれだけの造形をなし得たものだと驚嘆する。巻末には、金剛永謹氏が「金剛家と能面」と題した文を載せている。これは、密度の高い、奥行の深い素晴らしい文章であり、伝統を継承するということの重みが伝わってくる。その中で、氏は「・・・室町時代の面・・・能の創作期に作られた面からは、能面自身の持つ人格、作った人間自身の人生が伝わってくるのである。こんな面をつくれる人というのは、本当に地獄もしくは極楽をみた人間ではないだろうか。どちらかは分からないが、役者の方もどちらかに到達しないと使えないものだと思うのである。・・・この面（雪の小面）を私自身が使用したのは生まれてから現在まで二度だけ・・・、大事にしているから使わないというのではない。使う機会がないわけでもない。実際使う用意をしながら、直前になってやめたこともある。雪の小面のように感情の表現が凝縮しているように感じる面は役者の芸が寸分の狂いもないものになって初めて、使用することができるからである。役者のほん

の僅かな崩れが面の表情にあらわにみえてしまう、すなわち面の位に対する舞台の位という意味からなかなか選ぶことができない。・・・能の世界において、この面を使える域に達するのが修業なのだと感じるのである」と述べておられる。雪の小面は、室町時代の石川龍右衛門の作、能に傾倒していた豊臣秀吉が手に入れ、雪・月・花と銘をつけた天下の三面の一つ。秀吉は晩年に、「雪の小面」を能楽師の金春太夫に、「花の小面」を金剛太夫に、「月の小面」を徳川家康に分け与えたという。「月」と「花」は戦乱によって失われ、残った「雪」がどのようにして金春から金剛に移ったかという経緯も興味深い。それらの話を知って、あらためて「雪の小面」の写真を見ていると、通俗的な秀吉像とは全く別の、芸術に深い造詣をもった人物像が浮かんでくる。

知能は、大雑把に、流動性知能と結晶性知能に二分される。流動性知能は、知能テストで測られるようなもので、20歳頃をピークにして、加齢と共にどんどん落ちていく。一方、結晶性知能は、高齢になっても、なかなか落ちないどころか、心掛け次第で発達を続ける。茶碗、ぐい呑み、能面、その他絵画や彫刻等々についての審美眼と言うとおこがましいが、よいものがよいと判る能力や文章の読解力は、結晶性知能であり、自己評価をすれば、生涯で今が一番高いように思う。古希を過ぎて、心身共にいろいろな能力が落ちてきたことは否めないが、しかし、能力によっては、まだ発達の可能性があることを、そして興味の対象が増えていくことを嬉しく思う。



『粉引茶碗 銘 雪の曙』